

輝け! けんせつ小町

# 現場監督

宇佐七月 ● 桜上水ガーデンズ新築工事 — なでしこ工事チーム「桜スイダンテ」

かつては男性が圧倒的多数を占めてきた建設業界。近年は、協力会社の職人だけでなく、職人を管理する立場にも女性が起用される例が増えてきた。今回は、大規模現場においてコンクリート工事全般を任された弱冠24歳、入社3年目の若き女性現場監督を紹介する。

輝く、わたしの姿  
*Shine*



## 入社三年目、二四歳の現場監督

現場監督・宇佐七月は山口県出身。子供のころにテレビで見たリフォーム番組の影響で建築に興味を抱き、大学では建築学を専攻。当初は漠然と構造設計の道をめざしていたが、施工の授業でマンションの現場を見学してそのスケールに圧倒され、建設会社に入社した。

「設計の授業では図面を引くだけで、具体的にどうやって造るのかはあまり意識していません

でした。でも、その現場見学で初めて『こんな大きなビルも人が造ってるんだ』と感じたことが、建設会社への入社を考えるようになったきっかけですね」

入社一年目、最初の半年は本社での研修、次の半年は現場で生産設計に従事した。二年目、現場勤務が決まった際、「いい機会なので自分が図面を引いた工事に携わる方がいい」（内川所長）ということ、同じ現場に今度は管理者として着任した。「生産設計」とは、いわゆる設計図から、職人が現場で作業をするために品質・工期・生産性などを考慮して、より具体化・詳細化した施工図を作成する工程。

「描いている時はただの線や丸だったものが、どういう素材でどうやって造られていくのかを間近で見るとするのは本当に勉強になりました。図面を描いていたころも時々先輩と一緒に現場を見たりしてたんですが、やはり職人さんの作業を目の当たりにすると、もっと仕事しやすい方法があるんじゃないかと思わされることがたくさんありましたね」

## コンクリート 一万八、〇〇〇立方分の自信

現場では、閑静な住宅街にある大型団地を建て替え中。約五〇年前に建設された四〇〇戸の団地を解体し、約九〇〇戸のマンションを新築

自分が図面を引いたものが、  
職人たちの手で  
形になっていく、  
その面白さを感じた

「全部に目を向けるのはまだ無理ですけど、少なくとも自分の工区に関連するところは何をやっているか細かく把握して…その中でも特に安全面には気を配るようにしています」





何も知らなかった自分が、  
職人さんと話し合える  
くらいに成長できた

わたしが伝える

# Sender

## Profile

うさ・なつき◎1990(平成2)年、山口県生まれ。高校卒業後、関西の大学で建築学を学び、現場見学をきっかけに大林組に入社。1年間の研修を経て、現在の「桜上水ガーデンズ新築工事」の現場に配属。当現場は、研修期間中に生産設計を実習した場でもある。昨年1年間、コンクリート工事の施工管理を担当。なでしこ工事チーム「桜スフィダンテ」に所属し、現場環境改善にも取り組む。

三階まで階段で上がったたり下りたり。この一年間、体力的にけっこうきつかったです。自分が行かなければ何十人もの作業に支障が出て、工程にも遅れが生じる。ちょっと体調が悪いからといって簡単には休めない、重い責任のある仕事だ。その分、自分が担当した棟のコンクリート打設が終わった時は感無量だった。「打ち終えたのは最近です。建物を囲んでいた足場が全部撤去されて、外壁もきれいに塗装されたのが初めて見えて、景色が一変して。心に残る風景でした。これは他では味わえない、現場ならではの醍醐味ですね」

上/鉄筋業者と打設前の打ち合わせ。「みなさんやさしいのですが、本当は怒りたいのに私が未熟だから飲み込んでるのかな、と思うこともあります」  
右下/左から内川所長、生産設計の村田主任、宇佐、太田。  
左下/既存の樹木を多数残したままで行われている建替工事。通常の新築工事よりも気を遣う部分が多い。



する。宇佐が着任してから担当しているのは、五工区のうち、一工区分のコンクリート工事だ。「最初は本当に知識も何もなかったんで、職人さんが『こうしたらいい』って言ったらその通りにするしかないし、職人さん同士で違うことを言ったらどっちが正しいのかもわからなかったんですが、一年間コンクリート工事を担当して、さすがに多少はわかってきました。職人さんの言い分に対して、ただ聞くだけじゃなく擦り合わせというか、少しは話し合いができるようになったと思います」

「この前計算してみたら、自分が立ち会って打設したコンクリートの数量が、一万八、〇〇〇立方メートル。ちょっと想像つかないですけど、建物一棟分って考えると、よくがんばったな」と

コンクリート工事と一口に言っても、生コン会社、圧送業者、打設業者、左官業者など数多くの協力会社に関わる。また現場内は五つの工区に分かれているため、ミキサー車の駐車スペースや通行ルートなど他工区担当者との調整、さらに道路規制があるのでほとんど全ての車両について警察の許可を取得する。その業務も担当している宇佐にとって、日々の仕事量は膨大なものになる。

「勤務時間は非常に長いです。朝は早いし、夏暑くて冬は寒くて…。電話が一日中鳴って呼ばれるから、エレベーターができるまでは毎日一



チームで輝く!  
**桜スフィダンテ**

上/なでしこ工事チーム名の「スフィダンテ」とは、「イタリア語で挑戦者という意味です。いろんなことに挑戦して、がんばっていきましょう」と(村田主任)

右/「東京五輪などにより今後は建設需要が高まります。業界の課題である人材不足に対応するためにも、女性の技術者や管理者に対し建設業への入り口を広くするとともに、さらなる登用を促していきたい」(内川所長)



わたしたちが造る  
*Team*

どうしたら女性が入りやすくなるか?

現場では、桜上水にちなんでなでしこ工事チーム「桜スフィダンテ」を登録し、女性が働きやすい環境づくりに努めてきた。チームのリーダーで、この現場で生産設計を担当する村田亜希子主任は、研修時代の宇佐を指導した立場だ。「元々女性が多い現場だったので、女性の職人さんに職員と同じ女子トイレや更衣室を使ってもらえるようにしました。宇佐さんを最初に見たときほっそりしてるからちよっと心配でしたけど、今は現場に出てがんばってますよね」

現場をまとめる大林組・内川克幸総合所長も、女性の活躍に期待を寄せる一人だ。

「大林組ではわりと早くから現場に女性を登用して、事務所に女性用のトイレ・ロッカー、休憩所を用意することを当たり前にしました。だからなでしこチームには、もつと根深い部分、いかにすれば女性が入りやすくなるかっていうところを見つけてもらいたいと思ってます」

女性現場監督からも一言。

「私としては、すでに建設業で働いてる女性がいるっていうことをもつと広く知ってほしいです。女性が少数派じゃなくなれば、課題も自然と改善されていく気がしますね」